

『蘭におもう』内容及び補足

目次

I

- 育つもの
- 牡丹濃艶人心を乱す
蝶を着て舞う
- 蘭におもう
- 門松雑感
- 鬼を驚かせ
- 土地婆のはなし
- 中国の茶
辻褄つじま
- 中国の姓氏
- 公案もの
- わが四行詩
- 網羅する意欲
- 六和塔に水滸伝をおもう
- 二十四史の刊行について
- 廬陵の曾先之
- 動揺する心
- 旅の道連れ魯迅
- 魯迅の原籍のこと
- 月をうたう毛主席
- 歴史をみる毛主席

II

- 南京の雑踏で考えた
日本人と中国人
- 旅の半ばにおもう
― 隴海鉄道の車内にて
- 大寨のこと
- 天山を行く
- 達坂ダフンを越えて
- 喀什カシュガルから和田ウチンへ
- 高昌周辺
- 異色の高昌城
- 永泰公主墓のほとりて
- 仰ぎみる塔
- 銅鏡
- 中国古代人と青銅器
- 漢代の食生活
- 長沙T字型彩色帛画について
- 儒教以前の中国発見
― 長沙古墳におもう―
- 臨沂リンギ西漢墓幻想
- 幻想四世紀



徳間文庫版表紙

「育つもの」補足

『蘭におもう』冒頭の「創作 育つもの」は、味わい深い作品です。目次では、ただ「育つもの」となっていますが、本文掲載箇所では「創作」がついています。フィクションなのでしよう。

花好き、それも、木に咲く花が好きという主人公が、年月かけて木を育て、庭造りをしていった。ところが、数年ぶりに友人が訪ねて行くと、見事な木立の庭が幼稚園になつてしまつていたという話です。こういういい方は大作家に失礼ですが、起承転結が見事です。

些細なことですが、作中、興味深い記述があつたので次にあげます。

中国で花を「客」にたとえることがある。牡丹が貴客、つまり、やんごとない客であり、梅がさつぱりした客、清客であり、桃が妖客といわれる、といったことも、李さんが説明してくれた。

寒客えんかくが臘梅ろうばい、醉客すいかくが木芙蓉もくふよう、悪客あくかくが曼陀羅まんた華わなどというのは、なにやらわかるような気がする。(中略)

「含笑花かんしやうかはどんな客ですか？」と、訊いた。

このとき、李さんの顔色がふと変わった。(なにか気にさわることを言ったのかな?) 私は不安になった。

しかし李さんはすぐに笑顔を浮かべて、「含笑花かんしやうかは佞客ねいかくです。おもねる客…あんまり、においが強烈なため、そう名づけられたのでしよう」

「旅の道連れ魯迅」補足

■陳舜臣さんは、篠原伯母野山に自邸を新築したとき、庭に、母親の思い出に連なる含笑花を植えました。よく髪に挿したりハンカチに包んで持っていたということですが。

「旅の道連れ魯迅」に杭州の話が出てきます。

西湖湖畔に『楼外楼』、『天外天』という二軒の著名な料理店があつた。陳舜臣さんは『楼外楼』で蟹料理を食べ、ふと、魯迅に『集外集』という作品集のあることを思い出す。杭州は魯迅の故郷、紹興に近いから、魯迅はきつと、『集外集』命名の時、蟹をたべた楼外楼や、蝦えびをたべた天外天という店名を頭に思いついたにちがいないと推測する。楽しい文章です。



霧にかすむ西湖 編集委員撮影

『竹におもう』内容

『竹におもう』初出ほか

エッセイ集『竹におもう』所収34編は、一九六九〜七九年の間、毎日・読売・朝日などの新聞、宝石・小説新潮・現代・週刊朝日などの雑誌、種々全集等添付の月報などに掲載されたものです。

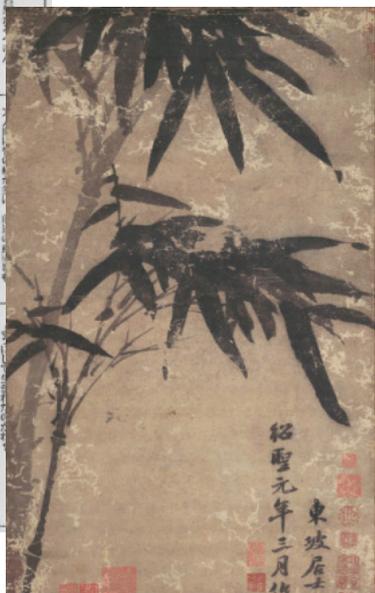
その内の一編、「毎日新聞」の一九七九年一月五日夕刊に掲載された「竹におもう」を単行本の題名としています。

目次

- 私の原風景・祖父の本
- ひと、本に会う
- わが家の先祖・無断拝借
- 『三国志』の作者
- 契丹と茶
- 詞梨勒の樹
- 石榴におもう
- 竹におもう
- 締めくくれない話
- 枕中の書
- 最後の晚餐
- 江南の味
- 猫物語
- 史実と小説
- 出発のころ
- 同窓・司馬遼太郎
- 一九六四年頃のこと
- 風の的
- かぐや姫―昔ばなし
- もう一つの読み方
- 小説の祖型『今昔物語』
- あやしの共感
- 絶句拾遺
- 史記のおもしろさ
- 中国史書のなかの日本
- 水滸伝と私
- サシミの詩
- 一日中食べ物比較考
- 味覚にみる上方と江戸
- 牛談
- 孤仏と群像
- 泥中の宝
- カシユガル賓館
- 琉璃廠の歴史
- 名画への挑戦
- ―中国画家趙万氏の秘密
- 殷周銅器の贋作者たち

徳間文庫版『竹におもう』キャッチコピー

竹を指さして王徽之は、^{おうきし}“なんぞ一日も此君無かるべけん”^{そとうぼ}と言い、蘇東坡は、^{しんく}“肉が無ければ人は瘦せ竹が無ければ人は俗っぽくなる”^{しんく}と言った。蘭や菊の香りが高く、梅は寒さのなかにりりしく花を咲かせ、竹は雪を負い霜を懐にしても、その青さを変えない。このことから、蘭菊梅竹を“四君子”^{しんく}と呼び、唐以来、絵画のテーマにされてきた…。人事から動植物までの森羅万象に悠久の文化の根をたずねる好エッセイ集。



■蘇東坡が描く竹は、見る人に、「どうして節をえがかないのですか？」と問われるような竹であったというが…。左の画像は蘇東坡の「墨竹図軸」。節がないわけでない。

「毎日新聞」1979.1.5夕刊

『竹におもう』いくつかの補足



徳間文庫版表紙

「わが家の先祖・無断拝借」補足

陳舜臣さんご自身のルーツに関する記述は、集英社『陳舜臣中国ライブラリー25』「天竺への道」に詳しい。陳舜臣さんは、そのルーツは、玄奘三蔵(俗姓は陳)と同じで、現在の開封市に近い潁川だといふのです。



『陳舜臣中国ライブラリー25』のメインは『新西遊記』で、『新西遊記』の初出は『週刊読売』一九七四年一月五日号〜七五年一月四日号です。そして、『竹におもう』「わが家の先祖・無断拝借」の初出が、『現代』一九七五年八月号です。従って、この時期、陳さんは、自身のルーツのことが頭にあつたのでしよう。「わが家の先祖・無断拝借」から抜粋・引用します。

陳姓は帝舜の末裔が潁川の陳の地に封じられ、その子孫であるということになっていく。だから、ご先祖にあやかつて舜という字を名前につけたがり、おかげで私には同姓同名が多い。

陳姓の遠祖は舜の末裔だが、だんだん分家して、私のところの始祖は後漢の陳寔だとされている。

ところで陳寔は後漢の人、我が家の始祖とするのは、かなりあやしいといわねばならない。

じつは私の代で三十三世であると教えられている。それでは、せいぜいさかのぼっても、宋元にしか行かない。まして後漢など、いくら勘定しても、計算が合わないのである。

「絶句拾遺」補足

明治の初期、清国駐日公使館参贊として五年間日本に勤務した黄遵憲、阿片戦争から二十年近くたつて、當時をよんだ清の項兆麟、明代の画人・詩人、徐渭、清初に日本へ亡命・帰化した文人朱舜水、戊戌新政に失敗、日本に亡命したのち、辛亥革命後の母国に帰つた康有為、かつて紅軍の総司令であつた朱徳、明末・清初の画人・文人、八大山人、そして無名の一人、一グループ、それぞれの絶句を取り上げています。

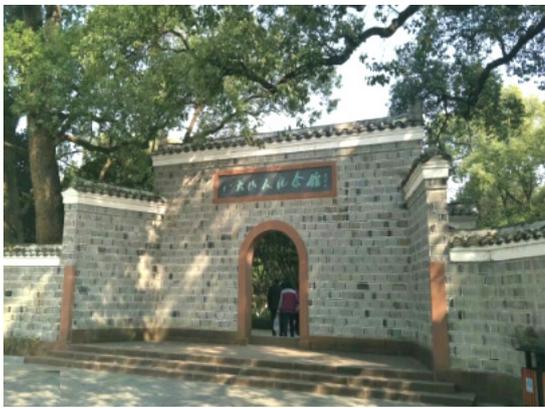
このなかで、黄遵憲と八大山人は、

陳さん思い入れの人物です。特に、八大山人は、『夢ざめの坂』で大きくストーリーに絡みます。

八大山人について記述されている箇所を引用します。

最近、中国江西省の南昌市を訪ねた。南昌郊外の青雲譜という道館(道教の道場)に、文人でもあり画人でもあつた八大山人が、ここに二十五年間住んでいたといわれる。その青雲譜跡が、「八大山人記念館」となつて、彼の書画や関係資料が展示されていた。ところが、文革以来、そこは閉鎖されたままになつていたのである。……

私(橋)も南昌へは行つたのですが、当時の関心は共産党の八一南昌起義ばかりにあり、「八大山人記念館」へ向かなかつたのは返す返すも残念!



八大山人紀念館

<https://travel.qunar.com/>より

「水滸伝と私」補足

陳さんは、一九七四年、杭州を訪ねたとき、六和塔に遊んだ。六和塔は、花和尚魯智深、豹子頭林冲らの終焉の地なのである。



杭州 六和塔

www.bing.com より

「水滸伝と私」のなかから、特に気になつた箇所を抜き出してみます。

水滸伝は作者のにおいが薄く、民衆の体臭が濃く漂っている。日本に生まれ育つて、故国を胸中に思慕していた私にとつて、水滸伝はふるさとの民衆に接する、貴重なよすがであつたといえよう。ふだん着の同胞。少年のころから、私が水滸伝にたいして抱いたのは、そのような親近感であつた。

武松の虎退治や連環の計など前半の「見せ場」にくらべると、方臘戦争はあまりなじまれていないようだ。しかし、私は宋江と方臘を照らし合わせた結末に、小説作家として深い興味をおぼえる。